

あにわにわ 通信

第16号

「あにわにわ」とは、ニュージーランドの
マオリ語で「虹」を意味しています。

2012.1.20

特定非営利活動法人あい・ぽーとステーション発行

代表理事：大日向 雅美・新澤 誠治

子育てひろば「あい・ぽーと」

住所：107-0062 東京都港区南青山 2-25-1
電話：03-5786-3250 FAX：03-5786-3256

E-mail：info@ai-port.jp
URL：<http://www.ai-port.jp>

全国版子育て・家族支援者養成講座事務局

住所：106-0031 東京都港区西麻布 2-24-25-509
電話：03-6657-8539 FAX：03-3499-8539

E-mail：station@ai-port.jp
URL：<http://www.ai-port.jp>

法人代表理事・恵泉女学園大学大学院教授

大日向 雅美

新年、いかがお迎えでしょうか。例年ですと「あけましておめでとーございませす」といふ言葉が明るく交わされる年初ですが、余りにも辛い出来事に遭遇した二〇一一年の思いを引き継ぎながらの年明けでした。被災地の方々の苦しみは今なお続いています。数か月を経て、厳しい冬を迎え、改めて大切な人を、そして、住む場所を奪われた方々の苦悩と闘いが、今こそ本番となっていることを、私たちはけつして忘れてはならないでしょう。

この一月中旬に「子どもの視点に立つた復興・まちづくり」をテーマとして全国自治体職員研修会(住友生命保険相互会社助成)を開催いたしました。今年で五回目となる研修会ですが、今回は子育てひろば「あい・ぽーと」のお隣りの

青山小学校を会場にお借りすることができました。研修会のテーマにふさわしい会場をお借りできましたのも、港区のお力添えあつてのことであり、青山小学校の先生方のご協力に心から感謝申し上げます。

本号では当日の模様について「報告をさせていただきます。報告をさせていただきますが、3.11以降の社会のあり方、人と人、人と自然の関係性について、各分野の専門家のお話を基に、参加者が様々な観点から熱心に討議を深めてくださいました。子育て・家族支援者の皆様もたくさんご参加くださいまして、本当に有難うございました。

研修会を終えた今、私はシンポジウムで基調講演をしてくださった神野先生が紹介くださった「オム・ソーリ」の言葉を、改めてかみしめております。「オム・ソーリ」とは、スウェーデン語で、「哀しみの分かち合い」を意味します。人生には喜びが多いことですが、それ以上に哀しみ

もいっぱいあります。哀しみを皆で分かち合つてこそ、社会が、そして、人々の暮らしが豊かになるという考えです。しかも、支えさせていただく側に、より多くの喜びがもたらされるということです。支援者の皆様のご活躍を願うとき、この言葉をいつも心に留めておきたいと思えます。

皆様のご活躍と共に、今年が、昨年流した涙を癒してくれる平和に満ちた年であることを、祈りたいと思います。

法人理事・白梅学園大学学長

汐見 稔幸

共感と共苦―想像力ということ
「今年はいいことがありますように」「今年のお年賀状にこう書きました。あけまして「おめでとーございませす」と書く気分になれなかったのです。みなさんも同じような気持ちでおられるのではないのでしょうか。

子育て支援者に大事なことは、支援を必要としている人の心の深くにあるその人の人間としての願いをしっかりと感じ取ることです。ね。そこで必要なことはなによりもまず「想像力」をしっかりと働かせること。想像力とは、楽しいことを頭の中に描くことなのですが、それはこれから未来にかけてのこと。過去のことについては、逆につらかったこと、不安だったこと、嫌だったことなどを逃げずに想い描くことを指すのだ、と思わないといけない気がします。だって、人間は過去の嫌なこと、つらかったことを忘れようとする

る本性をもっているのです。放っておくと、嫌なこと、つらかったことはみんな忘れていきます。

3.11のつらさ、大変さ。当事者たちは、それを忘れようがないほど、今も大変な生活を送っています。大事な肉親を失った悲しみ。放射線が心配で外に子どもを出せない親。寒い中で仮設住宅生活を強いられる人々…。

でも、直接の当事者でなかった私などは今、「そうだったよね」程度に、そのたいへんだった姿のイメージが実感から少しずつ遠のいてきている気がしてなりません。

共感をあらわす言葉はヨーロッパではcom-passionですが、このpassion. パッションは単純な情熱ではなく、もともとは受難すること、イエスの苦しみを受け止めて一緒に苦しむことを指しているといえます。悲しみ、苦しみなどから逃げずにそこに関心をしっかりと向ける情熱。これをpassionというそうです。共感の実実は共苦です。

支援が人の心に深く届く支援になるには、想像力を深く働かせることが最も大事なのですが、3.11という事件は、それを想像せよという形で、私たちを鼓舞している気がします。今年はいいことがありますように。



プログラム

開会・開会の挨拶

新澤誠治（あい・ぼーとステーション代表理事）
 澤春生（住友生命保険相互会社調査広報部上席部長代理）
 杉本隆（港区子ども家庭支援部長）

基調講演～子どもに優しいまちづくり～

仙田満（こども環境学会代表理事・放送大学教授）

シンポジウム

（基調講演）

神野直彦（東京大学名誉教授・政府税制調査会専門委員会委員長）

（パネリスト）

小澤紀美子（こども環境学会会長・東海大学教授）
 汐見稔幸（あい・ぼーとステーション理事・こども環境学会副会長・白梅学園大学学長）
 大日向雅美（あい・ぼーとステーション代表理事・恵泉女学園大学大学院教授）

分科会&子ども参加ワークショップ

（分科会①）

木下勇（千葉大学園芸学部緑地環境学科教授）
 松島隆一（千葉市こども未来局こども未来部こども企画課長）
 三上健（公益財団法人日本ユニセフ協会学校事業部）

（分科会②）

小澤紀美子（こども環境学会会長・東海大学教授）
 澤登早苗（恵泉女学園大学大学院教授・子育てひろば「あい・ぼーと」キッズ交流ガーデン講師）

（分科会③）

汐見稔幸（あい・ぼーとステーション理事・こども環境学会副会長・白梅学園大学学長）
 大日向雅美（あい・ぼーとステーション代表理事・恵泉女学園大学大学院教授）

（分科会④）

仙田満（こども環境学会代表理事・放送大学教授）
 杉本隆（港区子ども家庭支援部長）
 定之まり子（日本女子大学教授）

（子ども参加ワークショップ）

中山豊（こども環境学会専務理事・事務局長）

まとめ・フィナーレ

住友生命創業 100 周年記念事業『未来を築く子育てプロジェクト』助成事業

NPO法人あい・ぼーとステーション主催

全国自治体研修

（第Ⅴ期）

東日本大震災をきっかけとして、
 子どもの視点からの復興・まちづくりについて考える

後援:内閣府、厚生労働省、文部科学省、国土交通省、環境省、港区、こども環境学会

まとめ・フィナーレ

研修会最後のまとめ・フィナーレは、大日向代表理事、汐見理事を中心に、各分科会のコーディネートを務めてくださった木下氏・小澤氏・澤登氏・仙田氏・中山氏による各分科会の報告をしていただきました。後半、子ども参加ワークショップの子どもたちが登壇し、それぞれの作品を手を、グループワークの成果を発表してくれました。子どもに優しいまちづくりとは、子どもが元気に楽しく暮らせるまちである等々、の意見が活発に出され、辛いこと・嫌なことを忘れず、乗り越えていきたいという力強いメッセージに会場も拍手喝さいでした。

3. 11のつらさと苦しみを忘れず、しかし、夢や希望を持って、一人ひとりが地域で能動的に豊かな暮らしを目指し、新たな暮らしを創造していくことの大切を、参加者一同、確認しあって、研修会のフィナーレを迎えました。今回は、青山小学校を会場にお借りできたことも、子どもの視点を大切に企画にふさわしい研修会となったことを感謝いたします。ご参加してくださいました皆さま、ありがとうございました。



基調講演・シンポジウム

冒頭、被災地に黙とうを捧げた後、開会に際して、新澤代表理事、澤住友生命保険相互会社調査広報部上席部長代理、杉本港区子ども家庭支援部長から、それぞれ本研修に寄せる思いを込めたご挨拶をいただきました。

続いて、こども環境学会代表理事の仙田氏より「子どもに優しいまちづくり」と題してご講演をいただきました。子どもに優しいまちづくりのためには、子どもたちの参画を大切にすること、そのために子ども達の多様な意見を取り入れていくことの重要性について、ご指摘をいただきました。

その後のシンポジウムでは、まず東京大学名誉教授・政府税制調査会専門委員会委員長の神野氏より「危機を克服する懐かしい未来について」と題した基調講演をいただきました。今回の震災がもたらしたものは、従来の災害対策では解決できない危機であり、単なる災害復興の域を超えて、新たなビジョンをもって、人と人を、人と自然を繋ぐべく、地域の再創造が必要であると熱く語られました。

この基調講演を受けた形でシンポジウムが続けられましたが、こども環境学会会長の小澤氏と汐見理事も加わり、大日向代表理事の司会で、3・11以降の社会や人々の暮らしのあり方について、話が弾みました。「いのちを繋ぐとは共に生きること」、「危機は不安と不満を発生させる一方で、人間の英知を育て、人と人との支えあいを深める要素ともなる」など示唆に富んだメッセージが先生がたから次々と発せられました。最後に大日向代表理事が、3.11によって与えられたこの危機から立ち直り、新たな地域や人間関係を再創造するためにも、今、私たちが直面している問題点を整理し、構想することが大切であり、それを成し遂げる情熱を持ち続けようという言葉で、シンポジウムを締めくくりました。



分科会①

こどもの参画とまちづくり
 ～子どもにやさしいまち～

公益財団法人日本ユニセフ協会学校事業部の三上健氏がユニセフの事業について紹介をなされ、「子どもにやさしいまち」とは、次世代に快適な地球を伝える活動でもありとお話をされました。

次に、千葉市こども企画課長の松島隆一氏が、千葉市のこども参画についての考え方や、子ども向けに議会やフォーラムを開催されている実態について説明をされました。

その後、5グループに分かれて、「自分が住んでいる自治体で働きかけるとしたらどうするか」をテーマにグループワークをしました。行政の方と子育て・家族支援者さんが参加した分科会でもあり、多様な意見が出されました。

最後にコーディネータで千葉大学教授の木下氏が、日本の子ども達が積極的に参画するためには、子どもたちにもっとゆとりが必要であること、そのためにも政治や経済の健全さと共に、人と人との間に信頼関係を築いていくことが大切だとまとめていただきました。



分科会②

「農（いのち）」から考える持続可能なまちづくり

初めにこども環境学会会長・小澤紀美子氏から、住民主導・自然との共存を目指したまちづくりのモデルとして、北海道栗山町と岩手県葛巻町の取り組みを紹介いただきました。地域の活動拠点としての廃校の利用方法や、独特の気候を利用した自然エネルギーの活用など、「共に感じ、共に育み、共に創る」をキーワードにした住民参加のまちづくりについて具体的に知ることができました。

続いて恵泉女学園大学大学院教授澤登早苗氏から、大学の必修科目「生活園芸Ⅰ」とあい・ぼーと親子体験プログラム「キッズ交流ガーデン」についてご紹介いただきました。有機農法による野菜づくりは、いのちの循環への認識が芽生えるなど、人間も自然と共存していることを肌で感じる事が出来る大変有効な教育プログラムとなっているそうです。こうした子どもへの支援が、持続可能な復興、まちづくりにおいて、重要なプロセスとなることを皆で学ぶことが出来ました。



分科会③

「〈子ども・子育て新システム〉に対応したまちづくり」

最初に大日向雅美代表理事から、子ども・子育て新システムは、すべての子どもの育ちを社会の皆で支えようとする、子育て支援の理念に画期的な転換を図るものであること、そして、子どもの健やかな成長を保障するための柱の一つである幼保一体化について具体的な説明がありました。それを受けて、新システムについての疑問や各自自治体でこれを推進していく際の課題等について、汐見稔幸理事の司会のもと参加者と共に活発に意見交換がされました。幼稚園が新システムへの移行に躊躇しているのではないかと質問に、汐見氏から子どもの発達データを基にした移行の必要性について説明があり、賛否両論はあるが、議論が本格的になされていることに意義があると話されました。最後に大日向代表理事から、幼保一体化は子どもや保育に関わる人々の長年の悲願であり、子どものためにもこれ迄培ってきた歴史を大切にしつつ、新たな歴史を刻む必要があるという言葉で会がまとめられました。



分科会④

「国際化と高層化と地域づくり」

最初に、港区の子ども家庭支援部長の杉本氏から、国際化や都市化の先進地区である港区の現状と、地域コミュニティーの希薄化などの課題を克服を目指して実施されている取組や、待機児対策、在宅家庭向け子育て支援などについてお話をいただきました。

続いて、日本女子大学教授定行氏からは、建物の危険度判定など、東日本大震災後の被災地支援をされたご経験をご報告いただきました。被災地では地域のリスクを理解し、避難訓練を実施していた多くの保育園の園児が助かり、保育園の先生たちの避難誘導で地域の住民も避難することが出来た実話から、地域のリスクを知り、地域のリスクを伝え、地域のリスクを減らすことの大切さについても、学ぶことが出来ました。

未来を担う子どもたちを地域の皆で見守り、子どもに優しいまち作りをしていくことの大切さを再認識できた分科会となりました。



こども参加ワークショップ

港区の小中学生 30 名と全国からのゲストの子ども 6 名が集まりワークショップが行われました。まず、ゲストの子ども達が各自の作品を発表、続いて港区の小中学生



（青山小・青南小・赤坂小・赤坂中・青山中）が、冬休みを使ってまとめてくれた作品を発表しました。災害時には家全体がロケットになる、学校・公園などがフルーツの形をしたフルーツのまち、ビルの屋上が菜園になっているまち等、子どもならではの提案が多く見られました。

その後、参加した子どもたちが5グループに分かれて、話し合いました。ゲームを取り入れながらのシャッフルでしたので、初対面の子どもたちもすぐに打ち解けることができたようでした。先の発表を踏まえ、各グループでまちづくりにとって大切なこと、必要なこと等を話し合いながら思いついた意見を各自付箋に記入し、1枚の模造紙に貼っていきました。見る見るうちに模造紙は付箋で埋め尽くされ、各グループのまちづくりが完成しました。子どもたちの真剣な眼差し、活発な意見交換、その表情がとても印象的でした。

【バックアップ研修開講予定】

〈港区〉

二月六日(月)十時～十一時三十分
内容 子ども子育て新システムについて
講師 大日向雅美
(本法人代表理事)

子育てひろば「あいぽーと」施設長
会場 あいぽーと二階 多目的ホール

〈千代田区〉

二月六日(月)十時～十一時三十分
内容 保育で疲れた身体をほぐそう
(ストレッチ)

講師 飯作佳美(元劇団四季ダンサー)
会場 西神田児童センター 体育館

三月二十三日(金)十四時～十五時三十分
内容 活動状況報告及び課題解決に向けた助言
講師 大日向雅美
(本法人代表理事)

子育てひろば「あいぽーと」施設長
会場 千代田区役所教育委員会室

〈浦安市〉

一般・家庭的保育者

二月九日(木)十時三十分～十二時
十三時～十四時三十分

内容 特別支援
講師 小西行郎
(同志社大学大学院心理学研究科)

会場 高洲公民館 第三会議室
赤ちゃん学術センター

三月十六日(木)十五時～十六時三十分
内容 活動状況報告及び課題解決に向けた助言
講師 大日向雅美
(本法人代表理事)

子育てひろば「あいぽーと」施設長
会場 中央図書館 視聴覚室

児童育成指導員コース

二月八日(火)十時～十一時三十分
内容 活動状況報告及び課題解決に向けた助言
講師 野中賢治
(財団法人 児童健全育成推進財団)

企画調査室 室長
会場 浦安市健康センター 第一会議室

【子育て・家族支援者養成講座】

港区 子育て・家族支援者養成講座

(三級Ⅺ期)
開講日 二〇二二年一月二十日(金)
～三月二十三日(金)

【保育士資格試験受験 バックアップコース】

保育士資格試験受験バックアップコースを新設いたします。
期間 二〇二二年二月三日(金)
～九月二十九日(土)

申込みは、郵送がFAXで申込用紙をお送り下さい。
申し込みは、郵送がFAXで申込用紙をお送り下さい。

【家庭的保育者養成研修会を 受講して】

千代田区 岩本 亜希子
今回の研修会で、いわゆる「保育ママ」について

様々な科目の濃縮された講義を受ける事ができました。受講するまでよく知らなかった家庭的保育の現状、国や自治体の制度には、少し驚かされました。

例えば、浦安市では二名の保育ママが自宅を保育の場として家庭的保育を実施しています。

一方、江東区では二十五年前から家庭的保育を実施している方がいます。自治体によって様々です。そして今回のような研修を履修す

る事で、「保育ママ」の資格要件を満たす事ができるようになったのは、二〇一〇年四月に規制が緩和されたからです。保育を取り巻く社会的状況や法律の改正など、今が変化の時なのだと感じました。

講義の内容も、子どもの発達と保育、病気と栄養、安全確保など自分の保育活動を振り返りつつ、学びを深める事ができました。

受講した方達と話し合う中で、気づかされた、励まされたこともあり、貴重な機会となりました。ありがとうございました。

千代田区 原田 なな恵

家庭的保育(保育ママ)とは・・・「地域との関わりを持ちながら様々な経験を活かし、人生の先輩として、時にはお母さんとして、自らも管理に努めながら遊びを通してよりよい保育をするもの。」今回の研修会の一コマの中のグループ討議で七人の仲間であらためたものである。

利用されるお子さんが、ほぼ一日を過ごす場が家庭との延長上にあるという事は、地域との連携をとっているの、お子さんや保護者、保育者にとっても最良の形ではないだろうか。受講前は思い描いていなかった自身の位置が少し見えてきた気がする。実習を終え資格を取得した暁には今より現実的となりもっとやる気が起るものと思える。

浦安市 浅井 美樹

自分が子育てを経験し、これからは保育の仕事をしてみたいなど思ったのがきっかけで、子どもを預かる仕事をしてきました。子ども達と関わる中で意外に子どもが好きだったんだなと感じたり、子どもの成長を見ているのがとても楽しくなってきたりして、もっと専門的に学びたい、できれば二歳以下の小さな子どもの預かりもしてみたいという思いが強くなりました。

今回保育ママ補助者になる為に、家庭的保育者養成研修会を受講しました。実際に保育ママとして働いている方の話を聴いたり、保育ママ宅

での実習を通して家庭的な雰囲気の中で子どもも成長を見守ることが出来る保育ママの良さを感じました。初めて立つた、おしゃべりしたなど、保護者にとって大切な「初めて」の瞬間を私たち補助者も大切に、そのお手伝いができることを嬉しく思います。

浦安市は保育ママ事業が始まったばかりですが、補助者として何ができるかを考え努力していきたいと思えます。

浦安市 池永 有希子

浦安市で子育て・家族支援者養成講座があることを知り、「どんなことをするのだろう、私も自身の子育て経験を生かして役に立てることがあったらいいな」と受講させていただくことにしました。五月から三級の講座を受け、続いて二級の養成講座と、半年以上も学ぶことになりましたが、講義をしてくださる先生方のお話はどれも興味深く、勉強だと言ったことを忘れてしまつほど楽しいものでした。

家庭的保育者養成研修会では、実際に活動する際の詳しい内容やその注意点をふまえながら教えていただきました。こちらは知れば知るほど奥が深いものでした。家庭的保育者の仕事に誇りと責任を感じ、改めて身の引き締まる思いです。また、家庭的保育の素晴らしさ(家庭的な環境で地域の方に見守られながら行う保育の可能性)を感じ、家庭的保育者として子育て中のお母さんたちの不安を少しでも減らし、子育てを楽しみたいと思えます。また活動を通して自分も成長していけたらと思えました。

